

今年は、生物多様性条約の世界目標である愛知目標の達成に向け、引き続き、多様な主体との連携・協働を進めてまいります。

本号では、平成26年11月8日(土)に御宿町において開催されたミヤコタナゴ保全シンポジウムの開催内容等について紹介するとともに、連携大学の研究成果発表会の開催結果についても報告します。

ミヤコタナゴ保全シンポジウム「希少種ミヤコタナゴから生命のにぎわいを考える」を開催



図1 シンポジウムにおけるパネルディスカッション

ミヤコタナゴ *Tanakia tanago* は、コイ科タナゴ亜科に属する日本固有の小型の淡水魚類です。本種は、かつて関東地方の河川などに広く生息していましたが、開発に伴う生息環境の消失や悪化、オオクチバス等の外来種による捕食や密漁等の影響により生息数が激減し、現在では千葉県と栃木県の一部に生息するのみになっていました。

平成26年は、ミヤコタナゴが「文化財保護法」により「天然記念物」に指定されてから40年、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保

存法）」により「国内希少野生動植物種」に指定されてから20年の年に当たります。

それらを記念するとともに、ミヤコタナゴの保全の現状と課題を抽出し、今後のミヤコタナゴの保全を一層推進していくために、御宿町、県、環境省の共催で、平成26年11月8日（土）に御宿町公民館において、ミヤコタナゴ保全シンポジウム「希少種ミヤコタナゴから生命（いのち）のにぎわいを考える」を開催しました（図1）。本稿では、このシンポジウムの開催内容を報告するとともに、その結果を踏まえて、今後のミヤコタナゴの保全のために取り組むべき課題についても説明します。

CONTENTS

1	ミヤコタナゴ保全シンポジウム「希少種ミヤコタナゴから生命のにぎわいを考える」を開催	1
2	連携大学の研究成果発表会を開催	3
3	千葉県の外来種（ミシシippアカミミガメ）	4

ミヤコタナゴ保全シンポジウムの概要

当日は、雨の降りしきる寒空にもかかわらず、県内外からのべ165名の方々の参加がありました。



図2 配布したシンポジウムのポスター

シンポジウムは、以下の四部構成で行われました。

第一部「ミヤコタナゴの研究者からのメッセージ」

千葉県内を中心にミヤコタナゴの保全や系統保存を進めてこられた、公益社団法人 観音崎自然博物館・館長の石鍋壽寛氏並びに元千葉県立中央博物館副館長の望月賢二氏から、千葉県内のミヤコタナゴの生息地と系統保存の現状について基調講演がありました(図3)。また、ミヤコタナゴの保全のために必要不可欠である、二枚貝類の増殖についての今後の展望についてもお話いただきました。

第二部「生息地域の保全団体からのメッセージ」

御宿町ミヤコタナゴ保存会の宇田川晴男氏並びに栃木県自然環境課の墨谷祐子氏から、御宿町及び栃木県におけるミヤコタナゴ保全の取組について説明がありました。

第一部、第二部のミヤコタナゴの保全に関する研究や保全活動の発表から示された共通の課題として、①二枚貝類の減少によるミヤコタナゴ保全の難しさ、②保

全に関係する人材の確保の難しさが挙げられました。

第三部「全国の研究者からのメッセージ」

ミヤコタナゴと同様に「天然記念物」と「国内希少野生動植物種」に指定されているタナゴ類の「イタセンパラ」の保全の取組について、富山県氷見市教育委員会の西尾正輝氏から、「イタセンパラを子どもたちに積極的に触れさせることにより身近な魚にする」ことの重要性が指摘されました。次に、北海道大学大学院地球環境科学研究院の根岸淳二郎氏から、「二枚貝類が多く生息している水路は淡水魚類の種数が多い水路であり、そのような環境を守ることがタナゴ類の保全につながる」という、淡水域における生物多様性保全の重要性についての研究成果についても紹介がありました。さらに、岐阜経済大学の森誠一氏から、希少種の保全については、「希少種も外来種も、人間の行為によって作られる。どちらも人間が原因であるのであれば、人間が何とかできる」との提言がありました。

第四部パネルディスカッション「ミヤコタナゴを守るために何をすべきか」

「飼育下でミヤコタナゴを増やすための技術は確立できた。問題はいかにして野外で増やすか」という問題提起がなされ、「二枚貝類の生息環境を守ること」、「二枚貝類の生息できる環境を復元すること」、「ミヤコタナゴと二枚貝類の保全にかかわる人材育成を進めていくこと」の重要性について、会場と認識を共有することができました。一方で、ミヤコタナゴが法律で守られてきたにもかかわらず、現在もなお絶滅の危機に瀕している理由として、「法律で規制されることにより、生息地の管理がしづらくなったこと」や「ミヤコタナゴが身近な魚でなくなってしまったこと」にあるとの意見がありました。また、残念ながら、現在でも密漁者がいることについても情報提供がありました。

ミヤコタナゴ保全の今後の課題

このように、ミヤコタナゴの保全のためには、解決しなければいけない課題が山積している状態ですが、「地域の皆さんと協力して生息環境を維持・改善していくこと」、「地域の目でミヤコタナゴを守っていくこと」が重要であり、そのための支援や活動の枠組作りを行政が中心となって進めていく必要があります。石田義廣御宿町長からも「ミヤコタナゴという特殊な

魚をいかにして普通の魚に戻すかが地域で保全を進めていく上で重要」との発言がありました。また、二枚貝類の専門家の根岸氏から、「二枚貝類の現状を把握し、二枚貝類が多く生息する場所にミヤコタナゴの新たな生息地を作ることも重要」との提言がありました。根岸氏の提言のとおり、今後ミヤコタナゴを保全していくためには、既存の生息地の環境を維持し続けることだけでなく、かつての生息域における魚類や二枚貝類の生息状況を調査し、新たにミヤコタナゴの生息地を「復元」する取組も重要になります。このような取組も含め、県では、国や関係市町村と連携しながら、「ミヤコタナゴを子どもたちの未来に残していく」ための取組を進めていきます。



図3 シンポジウムでの講演
(鈴木 規慈 千葉県生物多様性センター)

連携大学の研究成果発表会を開催

千葉県は、江戸川大学、千葉大学、東京大学、東京海洋大学、東京情報大学、東邦大学の6大学と「生物多様性に関する千葉県と大学との連携協定」を締結しています。その協定に基づく取組の一つとして、毎年1回、千葉県の生物多様性に関する研究成果発表会を開催しています。今年度は「大学・市民・行政の生物多様性保全の取組」をテーマにして、平成26年11月9日に東京大学柏キャンパス環境棟FSホールにて開かれました。連携6大学の生物多様性保全に関する研究成果や、それらの大学と連携して生物多様性保全活動を行っている市民団体の取組などの事例を、ポスター

形式で発表しました。また、開催地近隣自治体である柏市及び市川市の生物多様性保全の取組の現状についても紹介されました。

発表者とタイトル

●第1部 自治体の生物多様性保全に関する取組紹介

- 松本寛人 (柏市環境部環境政策課)
「柏市生きもの多様性プランについて」
- 浮貝昌彦 (市川市環境清掃部環境政策課)
「生物多様性いちかわ戦略について」
- 中村俊彦 (千葉県生物多様性センター・千葉県立中央博物館)
「千葉県における生物多様性地域戦略づくり」

●第2部 各大学、市民団体による取組のポスター発表

- 吉永明弘 (江戸川大学)
「生物多様性の普及啓発の手法について CEPA ツールキットの紹介」
- 上原浩一 (千葉大学)
「絶滅危惧種イスマスズカケの保全活動について」
- 福田健二・朽名夏磨・寺田徹・M. R. Mansournia・M. N. Uddin・M. Jarzebski・神保克明・渋谷園実・藤枝樹里・山本博一・横張真 (東京大学)
「東大柏キャンパス周辺の森林における放射能汚染の実態」
- 渋谷園実・福田健二 (東京大学)
「里山管理の生物相への影響」
- 宮本裕美子 (東京大学)
「土壌微生物の種多様性—樹木共生菌の事例—」
- 松村愛美・福田健二 (東京大学)
「関東地方の山地林と都市林における樹木葉内生菌の多様性比較」
- 杉田茂 (NPO法人ちば里山トラスト)
「柏市「大青田の森」における里山保全活動」
- 八代英二 (NPO法人こんぶくろ池 自然の森)
「こんぶくろ池自然博物公園化に向けて」
- 河野博 (東京海洋大学)
「小櫃川河口干潟の魚類の多様性」
- 佐藤瑤子・小田豪生・趙憶・原田一平・原慶太郎 (東京情報大学)
「千葉県の生物多様性情報のマッピング 1. レッドデータブックを用いた解析」

- 小田豪生・手塚祐介・鈴木裕也・中村光一・佐藤瑤子・原田一平・原慶太郎(東京情報大学)
「千葉県の生物多様性情報のマッピング 2. 生命のにぎわい調査団データを用いた解析」
- 加賀山翔一(東邦大学)
「淡水生カメ類の空間分布解析—ニホンイシガメの保全に向けた環境選考性と生息域の究明—」
- 坂入一瑛(東邦大学)
「生息適地の推定に基づくジャノメチョウのメタ個体群構造の把握」
- 山崎響子(東邦大学)
「館山・南房総におけるアライグマ(*Procyon lotor*)の環境選好性と、在来生物への影響評価」
- 寺園直美(神崎川を守るしろい八幡溜の会)
「印旛沼水系神崎川源流部の土水路と八幡溜湿地の保全活動の紹介」



総合討論の様子



ポスター発表の様子
(萩野 康則 千葉県生物多様性センター)

千葉県の外来種

ミシシippアカミミガメ



撮影：中込 哲

夏祭りに出かけると、「かめすくい」というお店を見かけることがあります。1回300円ほどですくえる小さいカメは通称ミドリガメと呼ばれており、よく見ると顔の両脇に赤い耳のような模様があります。このカメがミシシippアカミミガメ *Trachemys scripta elegans* で、北アメリカ原産の外来生物です。

ミシシippアカミミガメは、河川だけでなく公園やお寺の池などの人工的な水辺にも棲んでおり、岸に上がって日光浴をしている姿をよく見かけます。甲羅の長さは最大で28cmにもなり、食べ物は雑食性で成長するにつれて水草などの植物をよく食べるようになります。

ミシシippアカミミガメの幼体は、1960年代にペットとしての輸入が盛んになり、当時はスナック菓子の景品になるほどの人気だったそうです。やがて飼いきれなくなったカメが野外に放されるようになり、日本の各地で野生化していきました。野生化することで在来のカメ類と競合したり、希少な水草やレンコンなどの農作物を食べてしまったりと、その影響はとて深刻です。今では、カメ類の中で最も多く目撃される種類がミシシippアカミミガメとなった河川も少なくありません。

環境省が今年度中に作成しようとしている「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト(案)」に、ミシシippアカミミガメを加えることが検討されています。一方で、仮に特定外来生物に指定され新たな飼育が禁止された場合に、ご家庭で飼育されているミシシippアカミミガメが大量に捨てられるのではないかとこのことも心配されています*。身近な生きものが規制の対象と変わっていくことに、誰でもとまどいがあるかと思えます。「入れない・捨てない・拡げない」という外来生物予防三原則に則って、ペットを最期まで飼育することが大切です。

*特定外来生物として規制される前から飼育している場合は、許可を得て飼育し続けることができます。

(高山 順子 千葉県生物多様性センター)



生物多様性ちばニュースレター No.41 平成27年1月30日発行

編集・発行 千葉県生物多様性センター(環境生活部自然保護課)

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2 (千葉県立中央博物館内)

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <http://www.bdcchiba.jp/index.html>